

集会案内

日曜日

礼拝 : 2:00pm-2:45pm

教会住所

c/o Grace Hills Church
24521 Moulton Pkwy
Aliso Viejo, CA 92637
中庭の小さいチャペル

地図



ホームページ

www.irvinenihongokyoikai.org

榊原宣行牧師

電話(714)827-6244

Eメール: nobu@occc.org

杉村宰牧師

電話 (714)527-1456

Eメール:sugimura1950@gmail.com

◎石叫■

「野口英世」②

その年二十二歳で英世と改名し、二十三歳でアメリカに渡りました。そこで、フィラデルフィアに住んでいた熱心なクリスチャンのモリス夫妻と出会いました。この夫妻は、日本人留學生の面倒を熱心に見ておられる方で、明治のクリスチャン青年達の内村鑑三、新渡戸稲造、津田梅子らも大変お世話になった夫妻です。人種を越え親切にして下さるクリスチャンの姿を、モリス夫妻の姿から学んだのではないのでしょうか。彼はペンシルベニア大学医学部、ロックフェラー医学研究所研究員、細菌学者として、数々の論文を発表し有名になっていきました。ノーベル生理学医学賞候補に三度も選ばれる程でした。そのような時、南米に黄熱病がはやりました。黄熱病は蚊によってウイルスが体の中に入り、高い熱が発生し体が黄色く変色し、やがて死亡する怖い病気でした。野口英世はその研究のために南米のエクアドルに行きました。そこに行ったわずか九日目に、病原体を発見するという偉業を成し遂げました。その後、メキシコ、ペルー、ブラジルへと黄熱病の研究の為に渡りました。南米で終息した黄熱病は、次にアフリカで猛威を振るうようになりました。野口英世はアフリカ行きを決意します。しかしその時にすでに体調を崩していた彼に、多くの友人がアフリカ行きを反対しました。しかし、彼は「人間は、どこで死んでも同じです」という言葉を残して、ガーナへと向かったのです。そして研究のさなかの翌年の一九二八年、彼自身が黄熱病にかかり、五十三才で召されました。『人物による婦人聖研・聖書に触れた人々』「野口英世博士」。二〇一二年三月六日)

彼は生前、「自分が手の火傷をしなかったら、今の自分はなかっただろう」と言っていたという。「苦しみにあつたことは、わたしに良い事です」(詩篇一一九・71)とあるが、野口博士を支え続けたものは、このみ言葉ではなかっただろう。苦しみが嬉しいはずはない、むしろ痛みである、だが、主イエスは十字架につく直前の最後の晩餐で、「感謝してこれを(パン)裂き」(1コリント一一・24)と言われているが、死の向こうに人々の救いを見ていたがゆえに感謝があつたのである。それが死を乗り越える力であつた。とかく私たちは、現実に振り回されることが多いが、その向こうにこそ、眼を向けたいものである

Rev. Tsukasa Sugimura

「私達の教会の歩み」

2005年9月18日、アーバイン日本語キリスト教会は、南オレンジ郡地域の日系人とその関係する方達の救いのために、東洋宣教会北米ホーリネス教団オレンジ郡キリスト教会の伝道所として礼拝を開始しました。現在は、榊原宣行牧師の監督のもと、杉村宰牧師と啓子師をはじめ、田畑彰牧師、ジェームス・パーク牧師、佐藤裕士兄と、信徒達の協力で毎週礼拝をささげ、伝道と牧会の働きをし、月一回の家庭集会を開いております。

「ミッション・ステートメント」

アーバイン教会の使命は、罪の中にある人々を救うために十字架について死んで下さり、三日後に復活されたイエス・キリストの歴史的事実を、まだイエス・キリストを知らない日本語を理解出来る人々に、主の大宣教命令(マタイ28:18-20)に従って宣べ伝え、ホーリネスという愛の信仰を土台として信者達の信仰の成長をうながし、イエス・キリストとの祈り深い生活へと導き、整えられたクリスチャンとすることにあります。